

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 吉川 斉

本論文は、私たちにとって最もなじみのある古典作品である、いわゆる「イソップ寓話」の成立と展開を、古典文学作品における関連個所の網羅的分析、関連諸作品の写本分析を含む文献学的検証、そして近現代における日本への普及分析という三つの方法を用いて、明らかにせんと試みた、このテーマに関する我国では初めての総合的な研究である。

まず、著者は、そもそも「イソップの話」がなぜ「イソップ寓話」として捉えられるようになったのか、換言すれば「イソップ」と「寓話」の間にいかなる関係が成立するに至ったのか、という根本的な問題関心から出発する。著者は、「イソップの話」と「イソップ寓話」との結びつきを切断する。この問題設定は、オリジナルと評価してよい。そして、前者に関しては、ヘシオドス、ヘロドトス、アリストファネスとプラトンにおける諸用例を網羅的に分析し、他方後者に関しては、とりわけアリストテレスの『弁論術』とテオンの『修辞学初等教程（プロギュムナスマタ）』に着目する。

著者によれば、古典作品には確かにイソップに言及される例は見られるものの、「話」の内容自体は概してきわめて多様である。これに対して、個々の「イソップの話」に概念化による一般性を付与したのが、テオンの初等教育としての修辞学ないし弁論術である。ここにおいて、概念化されたものから個々の「イソップの話」が解釈され、それまで直接関係のなかった話が「イソップの話」に組み込まれるという逆転現象がおこる。後者の分析結果もまた、本論文が初めて明らかにした点である。

このダイナミズムを著者はいわゆる「イソップ集」、とりわけ「バブリオス集」のアトス写本の分析から具体的に検証してゆく。この作業は古典文献学者としての著者の力量を十分に示した部分として、積極的評価の対象となった。以上に加えて、著者は最終章で、近代日本における「イソップ寓話」の普及まで視野に入れて検討している。この作業は近年西洋諸国の古典学研究で一大潮流となっている「古典受容史」の一例であるが、同時に近代教育史研究にも寄与するものである。

しかしながら、本研究にも問題点がないわけではない。たとえば、著者の使用する「寓話」概念に対する文学史的、比較文学的検討が、必ずしも十分ではなく論述にやや曖昧な箇所が見受けられる。また、アリストテレス『弁論術』とテオンの修辞学との関係についての著者の考察は今後深めていく必要がある。

とはいえ、従来あまりに普及していたため必ずしも正面から研究されてこなかった「イソップ寓話」に対して、初めて正面から文献学的に検討を加えた本研究の功績は決して小さくない。

以上の理由により、本審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する次第である。